

説 教

聖日礼拝

北浜チャーチ

黒田禎一郎

2018年3月4日（日）

主 題：「あなたへの愛のこらしめ」

—その真意はどこに—

テキスト：ヘブル人への手紙12章4－11節

はじめに

- 子どもは、訓練されることが嫌いです。なぜでしょうか？
それは将来、きちんとした社会生活をするために、「しつけ」が必要であることを知らないからです。
- 大人もまた、上の人から教育されることを嫌います。なぜでしょうか？
それは自分のプライドが傷つけられることを恐れるからです。しかし、訓練を受けないと危険に陥ることがあります。
- 私たちの人生には、いろいろなことがあります。嬉しいこともあれば、そうでないこと、むしろ苦しいと言った方がよいこともあります。時には、なぜこのようなことが起こってしまったのかと、思わされることもあります。
- 信仰生活は長距離競争のようだと、著者は言っています。出だしは快調でも、途中で苦しくなってくることもあります。最後まで走り続けることは、そんなに楽なことではありません。しかし前回学びましたように、ランナーはよろめかないために、しっかりと目を留める必要があります。それは動かない物体に目を留めることです。すなわち永遠に変わらない主イエスを、見続けていくことです。それが、長距離走者にとって大切なキーポイントです。
- ところで、ヘブル人への手紙の著者は、次のように語っています。
12:4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。
この書簡が書かれた当時、ローマ皇帝が絶対的権威を誇っていました。中でも皇帝ネロによる迫害（AD64年）は、非常に厳しいものであったことは知られています。この書簡の受取人たちは、既に大きな迫害を受けていました。
10:32 あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。
10:33 人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった人々の仲間になった者もありました。
10:34 あなたがたは、捕えられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。
- 聖書や一般の歴史書にも記されているように、クリスチャンへの迫害は今日までつづいています。しかしキリストが受けられた十字架の苦しみに比べれば、それ以上の苦しみ

を味わった人はいません。キリスト・イエスが釘打たれた肉体の苦しみは、私たちの想像の域を超えています。そればかりか、天父神に捨てられ罪人となりました。しかし私たちは、そのキリストの十字架にこそ、神の救いがあることを信じています。

- ・ 今日、私たちは苦難の中で生きる目的について考えてみたいと思います。
2点

大切なポイント

1. 天父神のおこころを知る

12:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。

12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

- ・ これらの聖句は、旧約聖書（申命記8章5節、箴言3章11, 12節）からと思われまふ。そして忘れてはいけないこと2点あると、語っています。

1) 軽んじないこと

- ・ 著者はここで、書簡の受け取り人たちに、「あなた方は今多くの苦難に直面していても、世の人々が考えるように不運な災難であると思わないように、むしろ神が与えてくださった愛の訓練であると、思いなさい。」、と勧めています。
- ・ モーセがエジプトの王パロから逃れて、苦節の40年を過ごしてことも、またヨセフが奴隷として売られたことも、主が与えてくださった尊い訓練でした。
- ・ 同じように、私たちそれぞれの人生で起こったことも、また家庭で起こったことも、職場で起こったことも、あるいは教会で起こったことも、決して偶然ではありません。「こらしめ」を受けているその時は、理由が不明で理解できません。その結果、私たちは頭をかかえ、時には涙を流すことがあります。
しかし、そこには神の尊いご計画があるのです。
- ・ ここで使われている「こらしめ」という語は、原語では“*paideia*”（パイダイア）で、矯正のための「教育」、「訓練」、「養育」という意味です。
ですから「こらしめ」と訳されていますが、それは神が与えてくださる教育であり、訓練であり、養育であります。しかも大講堂で行われたり、あるいは衛生放送を通して行う授業ではありません。⇒個人授業による教育です。
なんという幸いではありませんか。
- ・ モーセもヨセフも、あるいは新約時代の伝道者パウロの人生を見ても、神の大いなる計画があったことが分かります。神は無秩序の神ではなく、私たちが秩序の内においでくださっています。ですから、「こらしめ」を軽んじないことです。

2) 弱り果てないこと

- ・ 神の御心は、神の子たちが苦しみの中で弱り果ててしまわないことです。

「こらしめ」という苦しみは、それほど力を奪ってしまうものです。自力で苦しみに対処するには、限界があります。約2000年前の当時も、苦しみのゆえに弱り果てた人がいたようでした。ですから、著者はそのように勧めたと思われまます。

- しかし、著者は神が許される「こらしめ」は、神の子にとって乗り越えられないものではないと言います。主イエスを仰ぎ見続けるならば、そこに主が臨在くだり、主の助けがあるからです。
- ヘブルの思考では、強調部分をはじめにもってくるのが一般です。そう考えると、12章5節、6節から、天父神のみこころ知ることができます。キーワードとなるのは、「主は愛する者をこらしめる」（訓練される）ところにあると思います。
- ですから、主の教育を「軽んじないこと」、そして「弱り果てないこと」が、忘れてはならないことです。

2. 私たちは指導者を必要とする

- 次に大切なことは、教育、訓練を受けるために指導が必須であることです。危険に陥らないように、安全な道を歩めるように、指導を受けることは大切なことです。

1) 「こらしめ」は必ずある

12:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。

- 神はご自身にかたどって、私たちをお造りくださいました。そして創造神の御心に従う者たちを「神の子として」扱ってくださいと言うのです。これは、忘れてはならない大切な一節です。
- 12:8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。
- 一般宗教は、「信じるならば、病気が癒され、種々の苦痛からも解放されて幸せになれる」と、人々を勧誘します。しかし聖書は、むしろキリストを信じたために、様々な苦難、患難を受けると教えています。ではなぜ、クリスチャンは訓練を受けるのでしょうか。それは主が与える教育、訓練です。

2) 「こらしめ」の目的

12:10 肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

- 神のこらしめには目的があります。それは⇒ご自分の「聖さ」にあずからせるためです。地上の長距離競争は、早くゴールに着くことが目的です。しかし、信仰生活はそうではありません。そうではなく、ゴールにおられる神の身元に着くことが目的なのです。
- 神の本性は「聖」です。ゴールが近づけば近づくほど到達点が見えてくるように、神の本性が見えてくるはずですが、そして単に見えるだけではありません。神の本性である「聖」

に近づくことによって、神の御姿に似るものに造り変えられていくのです。造り変えられていくために、苦難は必要なのです。

- 聖書は次のように述べています。 **1 ペテロの手紙1章**

1:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、

1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

- 信仰にあつての「こらしめ」は、私たちが神に近づけてくれるものです。

そして、神の御姿に似た者に造り変えられるところにあります。ここに「こらしめ」の目的があります。

3) 「こらしめ」の報い

12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

- ここに教えられる点があります。それは、神は苦難の報酬として「平安な義の実を結ばせてくださる」ことです。それは平安を生み出す義の実を与えてくださることです。
- 人間的に考えると、人は苦しみを避けたいと思います。なぜなら、苦しみは辛いことであり、自分の生活が破壊されるかのように思えるからです。しかしながら、苦しみは信仰生活を破壊するどころか、強固にします。苦しみは神との交わりを遠ざけるのではなく、むしろ神との交わりを強固なものにし、神なしには生きられないという体験をさせてくれます。こうして、私たちが神の御心になつた信仰生活を送ることができるようにしてくれるのです。

{例 話}

- 賢くない親は子どもを育てる時、子どもの前に置かれている障害物を取り去り、なるべく楽なコースを歩めるようにしてやるのが良いことだと考えます。いろいろ手を貸し、子どもを助けようとします。しかしそれが得策ではありません。その多くはひ弱で、自分のことしか考えないエゴイストになってしまいます。
- では、賢い親はどうするのでしょうか。適当な障害物を置いてやり、それを自分で乗り越えて行くよう仕向けます。苦しみを経験した人でなければ、苦しんでいる人の苦しみは本当に分かりません。ですから、苦しんだことのない人は苦しむ人への思いやりがありません。しかし苦しんだことのある人は、苦しんでいる人に対する思いやりを持つことができます。あわれみ深い人になることができます。
- それと同じように、神が与えてくださる苦しみを避けて通ろうとせず、それを受け止める人は神のみこころになつた人となることができます。神の御心になつた人とは、御霊の実を結ぶ人のことです。 **ガラテヤ5章**

5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

5:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。

- ここで教えられることは、正しい親子関係には愛があることです。親は天父神です。子どもは私です。神と私の関係、それは愛の関係です。神は私たちをご自身の御姿に似る者となるために、神は「こらしめ」（教育、訓練）を与えて訓練くださいます。
- いかがでしょうか。神の「こらしめ」は、愛から来ます。幼い子はまだ親の真意が分かりません。しかし成長とともに、その真意が分かるようになります。霊的にも同じことが言えます。神の「こらしめ」は、神の愛のしるしであります。私たちは信仰生活で、神の「こらしめ」（教育、訓練）を、どのように受け止めているのでしょうか。

ま と め

主 題：「あなたへの愛のこらしめ」
—その真意はどこに—

- 私たちは今日、神の「こらしめ」について学びました。その真意は神の愛にあることを学びました。人生で苦しみに出会うと、つい不平や不満が口から出易いものです。しかし、神がお許しくださる「こらしめ」は益となるのです。それは教育であり、訓練であり、養育です。
- 大切なことを3点学びました。
 1. 「こらしめ」は必ずある
12:8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。
 2. 「こらしめ」には目的がある
12:10 霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。
 3. 「こらしめ」に報いがある
12:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

* God bless you!